

草加市立病院

基本理念

草加市立病院は、市民のいのちと健康を守り、地域医療の中核を担うことを使命とします。



産科を再開しました

母児に優しい出産のお手伝い

草加市立病院は、平成17年3月に休止した産科を10月1日に再開いたしました。市民の皆様には、休止期間中、ご不便やご心配をおかけしましたことをお詫び申し上げます。産科につきましては、当院に限らず全国各地の病院で廃止や休止が相次いでおりますが、当院では産科の早期再開を最優先課題として取り組んでまいりました。その結果、5名の産婦人科医に勤務を引き受けていただき、再開が実現したものです。当院では、引き続き、分娩を希望される皆さんの期待に応えるため、助産師等の確保など産科体制の充実に全力で取り組んでおりますので、より一層のご理解とご協力をお願いいたします。

病院の皆さんに感謝

私が入院中、感動して忘れられないシーンがたくさんあります。帝王切開での出産、麻酔でもうろうとしていた私の手を安水先生がギュ

ッと握ってくださったこと。術後歩くのにも苦戦している私の体を気遣い支えてくれた先生。

手術翌日、「一生ベッドから起きたくない！」と思うほどの激痛。それでも、その日のうちに歩けるようになったのは、いつでもイイ顔で接してくれ

た助産師の方々のおかげです。初めての出産、不安ばかりだったけれど、



優しい笑顔で接してくれた助産師の方々のおかげです。初めての出産、不安ばかりだったけれど、

経験豊富な医師がバックアップ

当院は快適でかつ安全な妊娠と出産をモットーとし、産科医療のさらなる向上を目指します。産科外来、分娩介助、産後管理、新生児管理などは助産師主体とし、自然分娩を原則として一人お一人のペースにあわせての出産のお手伝いをいたします。

具体的には助産師外来、母親・両親学級、夫立会い分娩、母児同室、母乳育児援助などを行っております。

近年は出産年齢の高齢化により異常分娩が増加しておりますが、医師のバックアップにより万全



(右から)佐藤徳郎医師、大久保大孝医師、加藤真也医師、安水洗彦副院長、小林久晃医師

産科再開後、初めての赤ちゃんが誕生

10月3日、産科再開後、初めての赤ちゃんが2年7か月ぶりに誕生しました。旭町6丁目在住の田村直毅さん・朋美さんご夫妻の第

あの応援や励ましがなかったら、絶対に乗り越えられませんでした。

病院全体を見ても、一人ひとりがプロとしての使命をまっとうしている方々ばかりだと感じさせられ、自分たちがこの環境の中で出産できたことに、ただただ感謝するばかりです。分娩再開後、第1号で出産できたことに幸せを感じつつ。

最後に、草加市立病院産婦人科の益々のご繁栄をお祈り申し上げます。

田村直毅・朋美

を図りたいと考えています。

幸い、すべて産婦人科専門医資格を持ち、産科的技術のみならず、悪性腫瘍などの難手術にも習熟した経験豊富な医師が揃いましたので、思いがけない異常事態にも対応が可能となりました。

一方、先進的な胎児診断(羊水分析、胎児血流分析、超音波診断)や遺伝相談のご希望にもお応えすることが出来ます。

当院の小児科スタッフも充実しておりますのでトータル形で、母児の健康向上を推進してゆきたいと思っております。

ジにして、病院に届けていただきました。(上囲み) 10月9日には2人目の赤ちゃんが産声をあげました。荒川区在住の加藤雅史さん・真理さんご夫妻の第1子で体重は2898gの女の子が誕生しました。

1子で体重は2714gの女の子です。宇宙をイメージし、無限大に広がる可能性を秘めた名前にと、「ぞら」と命名したそうです。

そらちゃんに初めて会ったとき、お父さんは感動しすぎて「こんにちば」としか言えず、お母さんはそらちゃんが誕生する瞬間、胸がいつぱいで涙が止まらなかったといえます。

田村さんご夫妻は、お産ができる病院が少なくなり、市立病院の産科再開を待ち望んでいたとか。そして、再開の話聞き7月3日の予約受け付けの日朝一番で並んだといえます。「逆子のため帝王切開でしたが、先生や助産師さんが、励ましてくれたので安心して出産することができました」と喜びを語ってくれました。

産科病棟は、赤ちゃん誕生とともに、以前の活気が少しずつ戻ってきています。

産科病棟は、赤ちゃん誕生とともに、以前の活気が少しずつ戻ってきています。